

ユーカラにあらわれるハヨクペ

萩 中美枝

江戸期の文献では、しばしば蝦夷人の具足、甲冑としてハヨクペ（アヨックペ）をあげている。新井白石『蝦夷志』（享保五年）や、林子平『三国通覧図説』（天明五年）などには図解してもある。だが「甲冑他に未だ見聞せず、蝦夷志、三国通覧図説などにある所の図不審なり。恐くは真図に非ず」などという意見もある。

ユーカラにも、武装するためのハヨクペ hayokpe, ayokpe がよくあらわれ、一般にヨロイの訳が当てられている。次にあげたのは金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』（昭和六年）の中の一節である。

nep ne kuni	何といふことぞ
tumam-shirkashi	その五體のおもては
kanokampe	金のくさり
karitempe	くさりがたびらの
kanny hayokpe	神鎧（靈しき鎧）
etumam kashi	にからだのうぐを
koirkutune	ぐるつと包んで
tankus	刀の立つべきかたも

caranpeutekpe

知られぬもの

chisoinarape

あらはれ出でたり

ふだん、アイヌの神は人間と同じように、男神なら彫刻を、女神ならば針仕事をしている。人間の国を訪れるとき、神は衣を身につける。たとえば、熊の神ならば黒いハヨクペ（衣）をまとい、熊の姿になる。人間の国に出かけた神は、心の清い者の射る矢を受け取って倒れる。このとき、魂は、仮りの姿であった熊の耳と耳の間に座る。人間は、その神の霊を鄭重に迎え、ねんごろに扱って神の国にお帰しする。

「神々のユーカラ」⁽³⁾には、神が人間の国をたずねるときに仮りの姿になる様子が語られる。尊い神になればなるほど長い時間をかけて身仕度をする。小袖を着るのに六日⁽³⁾、帯をしめるのに六日、さらにハヨクペを身につけるのに六日⁽³⁾、帯をかけることも珍らしくない。「銀のしずく降る降るまわりに、金のしずく降る降るまわりに」と歌いながら大空を舞う kanny-ckap-kanny（神の鳥の神——シマフクロウ）が、貧しい子供の射る矢を受け取り、その子の家の賓客となったその夜、神は銀のしずくの歌を歌いながら家中を飾りつけ、

chiokere ko 私はそれを終ると
 hushko anpe もつゝ
 chishikopayar ままに
 chihayokpehe 私の胃の
 ashurpenuita 耳と耳の間
 rokashi kane okayash 坐つてゐました
 という物語があるが、これを紹介した著者の知里幸恵は、註で、次のように述べてゐる。

hayokpe 胃。鳥でもけものでも山にゐる時は、人間の目には見えないが、各々に人間の様な家があつて、みんな人間と同じ姿で暮してゐて、人間の村へ出て来る時は胃を着けて出て来るのだと云ひます。そして鳥やけものゝ屍体は胃で、本体は目には見えないけれども、屍体の耳と耳の間にゐるのだと云ひます。つまり、この場合のハヨクペは、神が仮りの姿になるときの変身の衣である。

釧路出身の八重九郎さん(一八九五—一九七八)は、サコロベ(6)のすぐれた伝承者だった。彼が気に入つていたものの中に、彼が題をつけたピンネラウアヨクペコシタカムイ ヤイエニューカラ pinne-raw-ayokpe-ko-sik-kanny yay-e-yukar (牡鹿のアヨクペの神が自らを物語る) という物語がある。伝承者は、このときのアヨクペをヨロイと訳した。

okay-an ike 私はいました
 an-kor-kotan 私の村
 otasut-kotan オタスツ村

kotan noski ta 村の中に
 an-kor-cas 私の城(があり)
 cas oske ta 城の中には
 hotke-ita-san 寝台(があり)
 ita-san kata 寝台の上
 hotke wa 寝
 okay-an ike 暮していました
 ita-san pasto 寝台の上
 nika wa an ko には
 an-kor-pinne-raw-ayokpe 私の牡鹿のアヨクペ
 as ruwe が立つて
 ko-yay kata 上の方に
 pinne-raw as ruwe 角を立てています。

(以下概略を述べる)

私は、その寝台の上で、育てのおばさんにたいせつに育てられて大きくなった。ある日、育てのおばがいねむりをしたときに、そおと起き上がり、牡鹿のアヨクペを身につけて鹿の姿となり、外に出ると、山の方に向つて走り出した。

村はずれまでくると、そこには昔から人間は行つてはならぬという言い伝えのある道があつた。けわしい道だったが、私はそこを行くことにした。高い木の下をくぐり抜け、低い木の上を飛び越えて、とんだりはねたりしながら進むと、急に視界が展けた。歩き歩きしながら見ると、広い草原に姿のよい木が立ち、きれいな池もある。ここが聞いていた神の遊び場なのであ

った。私は、池にとびこんで泳いだり、おかにあがって草を食んだり、木の枝に角をかけてみたりしながらあそんでいると、遠くから人間の声らしいものが聞えてきた。

近付いてきたのをみると、ほんとうに人間であった。大男が金の杖を持ち、前に六人、後に六人の若者をしがえている。

私を見つけた大男は「やあ、牡鹿がいるぞ、あれをし止めよう」といつて向ってきた。さきの若者どもが矢をつがえて放ったが、私は身をかわしたり角でたたき落したりし、あとの若者たちの矢も一本も受けつけなかったので、若者たちは全部逃げていつてしまった。大男は金の杖を武器に戦いをいどんだが、かなう筈もなく、逃げ出したのを追いかけて角ですくい、池の中に投げ込むと、どンドン走って城に帰り、アヨクペをぬいでもとの姿になり、ずつとそうしていたようなふりをしていて、目をさましたおぼは、私の食事の用意をするために立ち上がるのであった。

しばらくたったある日、小鳥たちが話しているのを聞くと、あの大男を性悪女が助けて夫婦になり、私をやっつけようという相談をしているというのだ。私はまた、おぼのすきをうかがって牡鹿のハヨクペで身を包み、悪者どもの村にとんでいった。村の中ほどの大きな家では、大勢集まって酒を飲んでさわいでいる様子。その前にたたずんでいる私を最初にみつけたのは犬であった。犬の数は次第にふえて、ほえたりかみついたりする。外のさわがしさに気付いた男の「外に鹿がいる」という報告を聞いた大男は「おお、それこそピンネラウアヨクペコシク

ポンペ pine-raw-gyokpe-ko-sik-ponpe (牡鹿のアヨクペの若いやつ)だ、さあ、あいつの息の根をとめてやろう」と言いながら外に出てきた。性悪女も、仲間の者たちも加わって戦がはじまった。

遠く私の村の方から物音が近付いてきて、そばに下り立ったのを見ると、私の育てのおぼであった。おぼは女槍をふりかざし、私は角をふり立てて戦った。昼も夜も戦い続け、仲間をことごとく失った大男と女は、手に手をとって逃げ出した。

追って行くと、人間を食う鳥ばかりの村、魔神の国まで来た。ここで最後の力をふりしぼって戦った。天までかけ上り、地にもぐり、巫術のかぎりをつくして、ようやく悪者たちをやっつけることができた。

さあ、私の村に帰ろう。いまはもう安心して牡鹿のアヨクペをぬげるのだ。……と、牡鹿のアヨクペの神が自分の体験を物語った。

右のようなサコロベに出てくるアヨクペをヨロイと訳した八重九郎さんは、トウイタク *tu-ue-ik* (散文の物語)の語り手でもあったが、次に紹介するトウイタクでは、アヨクペを仮面と訳した。

私が、毎日針仕事にせいを出しておりますと、小鳥たちが、こんなうわさを聞かせてくれました。「いやしい風体の醜い男が妻をさがして村々をあるいているが、もうそろそろこの村にやってくる」というのです。

もし、そんなへんな男が家に来るようなら何とかして追いかえさなければ、と考えているうちに遠くの方から足音が近付い

てくる気配がしました。

耳をすまし、巫力を傾けてその音を聞いてみると、下劣な男なんかではなく、むしろ人品卑しからぬ人物らしい。私は身仕度を整えてから、つつましく控えてその人の現れるのを待っていました。

入ってきたのは、うわさ通りの下品な男でしたが、それは、うわべだけと悟りました。私はその人のために食事を調べ、薄づくりの折敷に薄づくりの椀を揃えてさきげると、彼は高盛りの椀半ばにして私に差し出しました。私が、うやうやしくおしただいて残りをちようだいすると、その人はアヨクペをぱつと脱いだのです。

アヨクペの中から現われたのは、音に聞こえたオタスツ村の若者のりりしい姿でした。

……こうして私たちは夫婦になり、仲むつまじく暮しているのです。

「神の小袖、神のハヨクペを身にまとい……」と謡われれば、正装することであり、この場合のハヨクペは晴着のことをさす。

日高の沙流や胆振地方に伝承される人間の始祖神アイヌラックルは、うつくしいハルニレの神から生まれたことになっているが、彼の着る着物をハヨクペと呼ぶことがある。次にあげたのは、鍋沢元蔵氏（一八八六―一九六七）が伝承していたものである。

Kamuy suwop

神の筐を

（育ての姉が）

ranaranke

とり下ろし

ci-sina atu

結んである緒を

nuka epita

ほじぎ

suwop kam putta

筐の上の蓋を

etursera

はねると

suwop upsor

筐のふところに

tekekuspare

手を入れて

sana saple

とり出したのを

a-nukar ruwe

見たのは

ene okay

こうであった。

kane hayokpe

金のハヨクペ

ka-nokan-pe

糸目の細やかなもの

ka-ri-en-pe

糸もしなやかに

nyupnyupu

よくしまり

o-uhny-noka-

裾の焦げたあと

kor-hayokpe

のあるハヨクペ

……

ハヨクペは、男が用いることが多い。晴着として身につけるのも殆ど男である。が、神がシマフクロウやクマなどの仮りの姿になる変身用のハヨクペは、男女を問わず使用するし、女でも、とくに威儀を正さなければならぬときはハヨクペを身にまとう。

『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』には、註で次のように解説してある。

hayok だけでも名詞・動詞両様に使はれ、装束、装束すと訳しづまい。hayok-pe は装束するものゝ義で、鎧もその一つである。のみならず変装のごとく新しい大きな装ひも hayokpe である。恐ろしい山のやうな怪物を斬つてみれば中から眉目秀麗な大将があらはれて、「人も神も畏怖する我が hayokpe を、よくも斬つたな、さあ勝負しろ」と呼ばはるゝことなどがよく見え、鎧と普通にいふものよりはずつと広く、恐ろしい変装がみなこれであり、従つて岩や石の hayokpe も出て来、又之をば着ると云はずに中へはいると云ふのが常である。

「変装のごとく新しい大きな装ひ」とは、的確な表現だが「恐ろしい変装がみなこれ」ばかりとはかぎらず、うつくしい女神も身を装うためにハヨクペをつけることがある。

ユーカラには、ヒーローを育て上げた姉が、はじめて自分の身分やヒーローにかかわる事実を打明ける場面がある。

A-resupa pito	私が育てたひと
a-resupa kamuy	お育てした神よ
tane anakne	いまはもう
e-poro kusu	おまえが大きくなったので
tanepo tapne	いまこそ
husko ampe	以前からあったことぞ
chi-e-upaskuma	おはなします
tapampe kusu	それでこんな
chikohayok ne	装束になる

iki an katutuu ようなことをした
nehi tapam na のです(註)よ

右の場合は hayok になつてゐる。hayok は「装う」だけでなく「装ひ」の意味にもなるから、原著では「鎧をつけて……」とある。hayok-pe は「装ひもの」の意だと前にもふれた。だが装うといっても、身なりを整えるだけでなく、特別な場合にそなえて身じたくすること。また装束である。

ハヨクペを身につけるとき、多くは hayokpe upsor orke a-osiskiru (ハヨクペのきところの中に身を入れる) というような表現をするが、次のような言い方もする。

kamui hayokpe	神の鎧の
teke ne arpa	腕を掩ひ
chikinne arpa	脚を掩う
lomsam kashi	胸のあたり
mike kane	びかびかし
inikannu kane	われ着成す

ハヨクペで身をまとい、hayono (よく装う)。小袖などを「羽織る」というような言い方はほとんどしない。ハヨクペは、きちんと身を包む装ひ方をするらしい。

【註】

- (1) 松前志摩守徳廣『蝦夷島奇観補註』(文久三年)
- (2) 北海道のユーカラ yukar. 樺太でユーカラ yukara といへば、歌、歌声などという意。

(3) 萩中美枝『アイヌの文学ユーカラへの招待』(昭和五十五年)

(4) *i-wan* (六) という数は、多数の意味にもなる。

(5) 知里幸恵『アイヌ神謡集』(大正十二年)

(6) *is-kar-pe* ふしをもつもの。釧路地方では、日高の沙流や胆振地方でいう *vekar* (人間のユーカラ) にあたるものをこう呼ぶ。

(7) 薄づくりの……は、上等な……という意味で使われることもある。女が用意した高盛りの飯を男が半分食べて残りを女に与え、女が恭しく食べ終る *uweci-pe* (互に差す食事) は、婚儀を行ったと同じように考えられていた。

(8) 本文五四ページにあげたユーカラの一節に同じ語がある。註に「二語 (*kanokampe karitempe*) にて、くまりで出来たる *hayokpe* (鎧やマスクの称) のことなりといふ。金のくまりでぐるつと身を蔽ひて柔かからだのきくやうなものとらふ。語義をたしかに説明するものなれど、或は *pe* (上) *no* (よく) *-kamu* (かぶろく) *-pe* (もの) などの如くも思はれる。また、*ka* (糸) *-riten* (たわみ易き) *-pe* (もの) かと考へられる。」とある。

(9) アイヌラックルの着物の裾や鞆尻が焦げているのは、父親が雷神で、ハルニレのうつくしさにみとれて、つい足を踏みはずして落ちてしまったからだという。

(10) 鍋沢元蔵筆録、扇谷昌康脚注、門別町郷土史研究会編『アイヌの叙事詩』(昭和四十四年)三一ページからローマ

字表記の原文を採る。

(11) 金成まつ筆録、金田一京助訳注『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』II (昭和三十六年)

(はぎなか・みえ)